



ウネナシトマヤガイ 赤弥堂遺跡(下坂田)出土

貝塚の貝からわかる

縄文時代の環境

貝塚を発掘調査すると、土器や石器、動物の骨などとともに、土の中からたくさん貝が見つかります。多くはヤマトシジミやハマグリなど、現在の私たちにも食べている身近な貝ですが、よく調べてみると、中には人が食べたとは思えないようなとても小さな貝も含まれています。

さて、上の写真にある貝は、下坂田の赤弥堂遺跡^{あかみどう}で発見された、縄文時代前期の小規模な貝塚から出土した「ウネナシトマヤガイ」という貝です。写真では分かりにくいかもしれませんが、実物は大きなものでも体長約1cm程度しかなく、発掘調査中に肉眼で見つけるのは大変むずかしい小さな貝です。実は写真の貝も発掘作業中に見つかったものではなく、貝塚を発掘調査した時の土を集めておいて、後で細かなふるいにかけていたときに発見されました。

ところで、このウネナシトマヤガイはどのような環境にすんでいた貝なのでしょう。この貝はマガキの殻に張り付いて成長する貝で、波静かな湾の内側、水深1〜1.5m程度の砂や泥の多い浅い海の底や干潟に多く見られます。また、海のゆりかごともいわれ、小さな魚や生物が生育する環境をつくることでよく知られているアマモという海藻^{あまも}がたくさんある水辺に、この貝も多く見られる傾向があります。

このウネナシトマヤガイの好む生息環境を整理すると、赤弥堂遺跡の貝塚がつけられた今から約6000年前の縄文時代前期は海水面が今よりも高く、霞ヶ浦は太平洋とつながった海の入江でした。桜川をさかのぼつ

た下坂田の台地下あたりには波静かでアマモがたくさん繁る砂や泥底の浅い海や干潟が広がっていたことがわかります。赤弥堂遺跡に貝塚をつくった人たちは、台地の下に広がる浅い海や干潟から食料にするためにマガキをとっていました。そのときにウネナシトマヤガイもついでにきたのです。このように、貝塚から発見される小さな貝などを調べることによって、縄文時代の自然環境を考える研究も進められています。

ところで、ウネナシトマヤガイは現在の淡水化した霞ヶ浦では見ることができないことはもちろん、全国でも生息数が減少していることから、環境庁準絶滅危惧種に指定されています。これは海辺の開発や環境の変化により、日本の海岸からウネナシトマヤガイが好むような環境が失われつつあることと無関係ではありません。今回紹介したウネナシトマヤガイやアマモは、5月13日まで上高津貝塚ふるさと歴史の広場で開催している第17回企画展「海と河と縄文人」で、縄文時代の環境を示す資料として展示しています。貝塚から、縄文時代の霞ヶ浦をちよつとだけ見てみませんか。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場 ☎826・7111

国際博物館会議では、地域の博物館の活動を広めるために、5月18日を「国際博物館の日」に定めています。これにちなんで、5月18日(金)と5月20日(日)は入館料が無料になります。ぜひご来館ください。

岡市立博物館 ☎824・2928

上高津貝塚ふるさと歴史の広場 ☎826・7111